



げんきな子 がんばる子 やさしい子

園だより

2月号

北区立さくらだこども園
園長 西澤 尚子

さくらだゆうえんち

副園長 本橋 房子

1月に5歳児が「さくらだゆうえんち」を作り、4歳児や3歳児を招待して遊園地ごっこをしました。この遊園地は、5歳児2学級が一緒にどんな遊園地にしたいかを話し合い、電車や観覧車などの乗り物や、迷路、お店など10のグループに分かれて、それぞれの「こうしたい」が形になるように作り進めていきました。2学級混合のグループということもあり、初めは思いを出せない幼児がいたり、話し合いが進まなかったりしました。そういうときには思いが表せるように保育者が促したり、することが分かるように子どもの考えを保育者が絵や言葉で示したりすることで、自分たちの遊園地をどう作りたいかという目的を共有する意識が出てきて、仲間と言葉を交わしながら自分たちで進めるようになっていきました。遊園地を始める前にはそれぞれの役割を確認する姿も見られました。

今回は王子桜中サブファミリーの研究としても「さくらだゆうえんち」の様子を公開しました。さくらだこども園の保育者はその中で、幼児にとっての問いとはどのようなものか、主体的に学ぶ子どもたちを育むにはどのような保育者の援助が大切なのかを探ってきました。物との出会いを通して面白さや不思議さを感じ、「もっと知りたい」「もっとやってみたい」という思いから「どうやったらできるか」と考えていく、遊びが幼児にとっての問いであると言えます。また、保育者は、幼児の思い・気付きに共感したり、受け止めたりし、幼児がしたいことができる環境（材料・場・時間）を用意し、幼児同士がつながるように見守り支えることが援助として大切であると分かりました。日々の保育の中で子どもの気付きに寄り添ったり、じっくり取り組める環境を用意したりするなど、「させる」ではなく「子どもがしたくなる」を大切に関わっています。

さて、「さくらだゆうえんち」では4歳児を招待し、張り切って取り組んでいた5歳児の子どもたち。普段は友達に強い口調で言う子や、なかなか自分から動き出せない子も、年下のお客さんが困らないように、そして楽しんでくれるように考え、話すときに姿勢を低くして優しく話したり、乗り物の段差を低くしたり、怖くないように明るい迷路にしたり、射的や紙飛行機飛ばしの店では届くように的までの距離を近くしたりといった姿が見られました。これらは、保育者に言われたからしたのではなく、自分で相手のことや状況を考えて「こうした方がいい」と思っていた行動です。相手を思う心や自分で考えたり気付いたりする力は、これから自分の世界が広がっていく子どもたちにとってとても大切なことだと思います。

招待してもらった4歳児と3歳児は、さくらだゆうえんちをととても楽しみ、降園時には保護者にチケットを見せながら嬉しそうに話す姿が見られました。

そのような姿から人との触れ合いの中で学ぶこと、育つ力はとても大きいことを改めて感じました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により人との直接的な触れ合いが難しい状況ではありますが、子どもたちの育つ力を信じて、心と心の触れ合いを大切に教育活動を工夫していきたいと思えます。

ー 今月の指導のめあて ー

- < 3歳児 >
 - ・遊びや生活の中で、自分の気持ちを動きや言葉で表して伝わったときの心地よさを感じたり、やり取りを楽しんだりする。
 - ・自分なりに表現したり、楽器を鳴らしたりしながら、学級のみんなとすることを楽しむ。
- < 4歳児 >
 - ・気の合う友達と一緒に遊ぶ中で、自分の思いを表したり、相手の思いに気付いたりする。
 - ・年長児との関わりを通して親しみを感じ、あこがれや感謝の気持ちをもつ。
 - ・学級のみんなとすることを楽しむ中で、友達とのつながりを感じる。
- < 5歳児 >
 - ・自分のめあてをもってあきらめずに挑戦したり、繰り返し取り組んだりする楽しさを味わう。
 - ・友達と一緒に進める遊びや生活の中で、自分の力を発揮したり、友達のよさに気付いたりする。
 - ・生活に必要なことが分かり、見通しをもって行動するとともに、身の回りのことを丁寧に行おうとする。